

幼児科學疑問の心理的考察

東京都立武藏高等女學校

有元石太郎

前回の六歳幼児の科學疑問に續いて今回は七歳幼児の科學疑問を載せるつもりでありましたが、それを割愛し表題のやうな題目で幼児の科學疑問を考察してみたいと思ひます。

先づ物の名を聞きたがる 子供の科學疑問の最初は物の名前を聞く形式で始まります。雲をみて「あれ何に」、流星を見て「あれ何に」、キリンを見て「あれ何に」、蟲を見て「これ何に」といふ工合に尋ねます。こんな工合に手當り次第に初めてぶつつかつた物事に對して盛んに尋ねますが、このとき「それは流星、それはキリン」とその名前を教へてやれば、それで子供は満足して殆んどそれ以上質問をしません。なぜ子供は名前を聞いたゞけで満足するのでせうか。またなぜよく名を尋ねるのでせうか。

子供は物の名前をその物の本質を考へるのであります。ですから名前を聞いたゞけでその物の屬性を確めやうといふ考へが起きません。物の名を聞いたゞけにその物の本質がわかつたつもりであるのであります。このこゝは、幼

児は物の名はその物が最初からもつてゐたゞ信じてゐるこゝでもわかります。

イヌを見てもネコを見てもこの頃の幼児はそのイヌといふ動物名を離れてその動物を考へこれに人がイヌといふ名をつけたのだゞ考へたり、また自分の名は親がつけたのだゞ考へたりするやうなこゝはありません。自分の名は自分を表すもので、自分と不離のものであり、その名を取りかへるこゝなきは夢にも可能であるゞは思つてゐません。ですから物の名を聞けば、それ以上物の本質に關するこゝを知る意欲が起らなくて満足するのであります。しかし満足するといふこゝは満足以上に出ない場合が多いといふこゝから、これを如何に取扱ふかといふ問題もありませんがそれは次回にゆづりたいと思ひます。

稍々子供の内容が進みます「なぜ雲といふの」といふやうな工合の質問が始まり物の名の起源を尋ねます。然しこれも吾々の場合のやうに科學的の詮索の爲めではありませんが、物の名の起源がその物の本質を示すと思つてゐるから

でありまして、結局物の名を尋ねる心理から遠く離れたものではありません。

どうして、なぜの質問 子供の知能が稍々進みますと「こんごは」を「ひびいて」、「なぜ」を「いふやうな因果關係を知りたがる質問が盛んに連發して所謂質問時代が参ります。

「なぜ男と女があるの」

「なぜお月様はおつきぢいなの」

「なぜ夜は暗いの」

讀者のうちにはこれらの質問に解答を與へるのに苦しまれた方々もあると思ひますが、しかしこの質問も吾々の考へるやうな純科學的な因果關係を深く要求してゐるのであるではありません。初期の幼兒は吾々の如く事物現象を客觀的に視ることが出来ません。綜合もなければ分析もありません。従つて現象はすべて本質的に見えるのであります。本質的な實在が相續して起り、その間には偶然は少しも考へられず總べてに因果關係があり、總べては總べてに關係してゐるを考へるやうであります。なぜかといひますと、彼等には分析がありませんから事物現象を整理して、これは關係があるが、これは關係が無いといふやうな考察を加へることが出来ません。従つて吾々には解決が不可能のことも彼等は極めて勇敢に解決して平然としてゐます。試みに「お月様はなぜ落ちないの」を逆に子供に質問された保姆

の方がありました。それに對し「運轉手がお月様を運轉して走らせてゐるから落ちないの」を答へてケロリしてゐました。

なぜかうだらうか なぜこのやうに奇抜な答へをして満足してゐるのでせうか。

「なぜ男と女があるの」を「いふ質問に對して母が「さあ、わかりません」をいふならば必ず不満を感じるであります。「それは神様がおつくりになつたの、又は大昔の偉い人がつくつたの」をいつてもすつかり満足してその大昔のえらい人はだれがつくつたのかといふ疑問は起しません。「夜はなぜ暗いの」を尋ねますと「おてんこやう様がねんねするから」なき答へます。手當り次第に色々の事柄に關係づけて全く大人の思ひつかない答へを平氣でします。その關係づけは全く自己流であり無秩序であり、概念が混淆してゐます。

なぜ混淆する それは彼等に心性の客觀化がないからであります。客觀を意識することがあります。それは單に客觀を意識することによつて主觀を知るに過ぎなく、主觀、客觀が未分化の状態にあるのであります。それでありまして、これから自分の見るものは直ちに絶対を考へますので、これを客觀的に見るといふことがありません。すべては自己中心主義でありますけれどもそれは客觀に對立したものでなく著しく主觀の屬性を帯びた客觀であり、主觀客觀の混淆

を平氣で行ひます。それですから、自分のもつてゐる種々の概念を自分に都合のよいやうに全く思ひつきのまゝに配置するのであります。亂置されてゐても自分では秩序が立つてゐるつもりであります。月を運轉手が運轉するといつても彼は大眞面目なのであります。

總べては人がつくる 五六歳頃になります。兩親を無上に偉い者ミ考へ絶對者ミ考へます。食物が欲しいミ母がつつてくれます。着物が欲しいければ母が縫つてくれます。おもちやが欲ければ父が買つて来てくれます。これ以上彼等にまつて絶對のものはありませんでせう。全世界のもの總べて自分のためにあり、それは兩親がつくつてくれた者ミ考へます。稍々進むミ偉い人又は神様がつくつたミ考へるやうになります。お月様を運轉してゐるミ考へるのはお月様を人がつくつたミ考へるからであります。

「オシッコの中になぜお茶があるの」

「手の皮の中に何があるの」

「赤ちやんは小さいがなぜ」

お茶は人が造つたものであります。赤ちやんは小さく造られたのが不思議なのであります。試みに四歳の女兒に「ウンコは何でつくつたの」ミ尋ねてみましたら「わたしのウンコ泥でつくつたの、赤ちやんのウンコ粒々があつたからお豆でつくつたの」ミ答へました。

「私の小さいまきはごにゐたの」ミいふ七歳男兒の質問をうけましたが、これは親ミ自分ミの關係を出生に結合してゐません「それはお母さんのボンボの中にあるたの」ミ答へてやつたら「ちやお母さんが私を食べたの」ミ反問しました。これは母の外に自分がゐたミいふ考を示すものであります。では總べてのものは人がつくつたミいふ考へ方に一寸違ふやうであります。決して違つてゐるのではありません。やはり何か母以外のものが自分をつくつたミ考へてゐるのであります。「坊やはだれがつくつたの、神様か？偉い人か？」ミうん偉い人が坊やをつくつたの」ミ答へてゐます。「どうしてお母さんのボンボから産れたの」ミいふ質問も決して吾々の科學的解答を要求してゐるのではありません。生命の根源を問題にしてゐるのではありません。自分の出生に對する興味が先になつてゐるのであります。だれがつくつたミいふこゝが重大な問題であるのであります。かうした萬物人造ミいふ考へる年齢が進むにつれて次第にその物造主が自然界へ移りやがて本當の科學的の考察が始まります。扱て以上の幼兒の科學に對する心的過程を眺めますミ當然こゝに幼兒特有な科學指導方法があるこゝに氣がつかます。